

芸術系学部の学生に対する有効な就職支援について —美術・工芸に対する意識の変化に着目した探索的研究—

森田 佐知子¹

The effective job hunting support for art students: An exploratory research focusing on change of the perception about art

Sachiko MORITA¹

要 旨

本研究は、芸術系学部²において一般の民間企業³の内定を獲得した学生の美術・工芸に対する意識が、就職活動を通じてどのように変化したのかを質的に検討することにより、芸術系学部の学生に対する有効な就職支援を提示することを目的としている。

質的検討に際しては、少数事例においても科学性を担保できるメタ研究法SCQRM (Structural construction qualitative research method)を採用した。その上で、一般の民間企業の内定を獲得した学生に半構造化インタビューを実施し、M-GTA (Modified Grounded theory approach)に基づき、インタビュー内容を概念化した。そしてM-GTAを用いた分析により生成された16の概念を5つのカテゴリーに整理し、学生の就職活動を通じた美術・工芸に対する意識の変化に関する仮説モデルを作成した。

本研究より、芸術系学部の学生の就職活動の実態や、就職活動を通じた美術・工芸に対する意識の変化を捉えることができた。またこれまで先行研究で芸術系学部の学生の職業移行における課題とされていた「就職活動と好きなこと、やりたいこと(美術・工芸)という対立」構造から抜け出すために有効な就職支援の視点として、①低学年から美術・工芸以外の世界と関わるができる機会の提供、②経済的自立の必要性認識を促す取り組み、③就職は美術・工芸との新しいかかわり方のスタートとなることを伝える、という新たな知見を得ることができた。これら3点は、芸術系学部の学生に対する就職支援の根幹をなすものであり、今後これらをキャリア教育・就職支援に組み込むことで、芸術系学部の学生の職業移行に関する課題解決の糸口としたい。

【キーワード】就職支援、キャリア教育、芸術系学部、SCQRM、M-GTA

¹ キャリアセンター

² 本稿では、芸術系大学、芸術系学部、芸術系学科を総称して「芸術系学部」とする。

³ 本稿では、芸術系学部の学生が大学で学んできたことと直接的な繋がりのない民間企業のことを「一般の民間企業」と呼ぶ。

1. はじめに

佐賀大学では、2016年4月より芸術表現コースと地域デザインコースを持つ芸術地域デザイン学部を新設する。しかし、芸術系学部を卒業した学生の就職状況は、いくつか例外年はあるが、大学卒業者全体と比べて、一貫して低い（喜始、2014）。この原因として森田（2015）は、芸術系学部の学生は、好きなことややりたいことが実際の職業選択に結び付きにくいという現実に直面し、それまでの進路観・職業観を転換しながら進路選択に臨むという困難に直面している、と指摘している。では逆に、一般の民間企業の内定を獲得した芸術系学部の学生は、就職活動を通じて、自分たちが学び力を入れてきた美術・工芸に対する意識をどのように変化させ、一般の民間企業へと進路を転換したのだろうか。

そこで本研究では、芸術系学部において一般の民間企業の内定を獲得した学生の美術・工芸に対する意識が、就職活動を通じてどのように変化したのかを質的に検討することにより、芸術系学部学生への就職支援に関する有効な視点を提示することを目的とする。

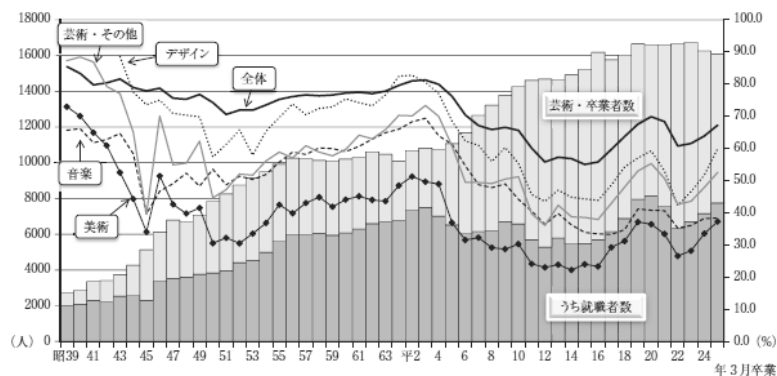
本稿の構成は以下の通りである。まず第2節では芸術系学部の学生の職業移行に関する先行研究を整理し、本研究の学術的な意義を論証する。第3節では方法について、第4節では分析結果を説明し、第5節にて本研究の知見とそれを踏まえた考察、そして第6章にてまとめと今後の課題について述べる。

2. 芸術系学部の学生の職業移行に関する先行研究

芸術系学部の学生の職業移行に特化した先行研究は多くの蓄積があるわけではないが、近年いくつかの示唆に富む研究がなされている。

まず喜始（2014）は、図表1を示した上で、芸術系学部を卒業した学生の就職状況にはいくつか例外年はあるが、芸術系、特に美術系学科での就職率は、大学卒業者全体と比べて、一貫して低いまま推移している、と指摘している。

図表1 芸術関係学科における就職者数及び就職者率の50年間で推移



出所：喜始（2014）

ではなぜ芸術系学部卒業生の就職率は低いのだろうか。この点についてまず、生駒(2010)は、芸術系学部の学生は、一見「就職」することよりも、芸術家・作家を目指した「直線的」な進路選択をする傾向があるように見える。しかし実際は、好きなことや、やりたいことと、実際の職業選択が結び付きにくいという試練に直面し、その結果、それまでの進路観・職業観の変容を行っている、と述べている⁴。

居郷(2012)も、芸術系大学の学生の進路は芸術家を目指すことを基軸にしながら、そのまま芸術家になる進路、民間企業に就職する進路、フリーター(進路未定・無業)となる進路に分かれていくことを指摘している。真鍋(2013)は、芸術系の大学においては、教員にとっても学生にとっても「就職すること」が中心的な課題とはなっておらず、むしろ個人的な創作活動を、社会の中に位置づけることによって報酬を得ることが重要だと考えられている、と指摘する。

喜始(2014)は、芸術系学科において、進路未決定者や就業意欲が低い学生が特段に多いわけではない、と指摘し、芸術系学部卒業生は芸術家／フリーランスとしての活動を希望したり、非正規雇用で働く者の割合が高いことをあげ、芸術系学部の就職における実態把握の困難性を指摘している。さらに選抜度の高い美術系学科では、「就職」を「制作の休止・趣味化」とする独特な意味づけがあり、自ら作家でもある実技系教員や強く作家を志望する学生から、就職に対する抵抗感の明言がされることがあるとも述べている。

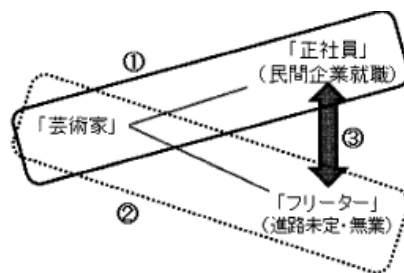
以上、先行研究より明らかとなっている芸術系学部の学生の職業移行における大きな課題は、以下の3点だと考えられる。

- 芸術系の大学においては、教員にとっても学生にとっても「就職すること」が中心的な課題とはなっていない(特に選抜性の高い美術系学科では「就職」＝「制作の休止・趣味化」という独特な意味づけがある)。
- 好きなことややりたいことが実際の職業選択に結び付きにくい。
- 芸術家／フリーランス、非正規雇用で働く割合が高いため、就職における実態把握が困難。

それでは就職という視点から、実際に学生をどのように支援・指導していけばよいのだろうか。この点について居郷(2012)は、図表2を示し、芸術系大学における就職支援の着眼ポイントを「芸術家」を理想としつつも「正社員」として卒業させることにあるとしている。

⁴ 生駒(2010)における京都造形芸術大学の学生141名を対象としたキャリアデザイン調査の結果では、高校時代には51.7%が作家志望であったが、大学入学後の学生は32.6%にとどまり「作家にこだわらず、将来の職業を考えるようになった」と答えた学生が29.8%であった。

図表2 芸術系大学の就職支援の着眼ポイント



出所：居郷（2012）

また喜始（2014）は、近年では作家志望の減少と就職希望の増加という傾向があり、教員には実技面のサポートだけでなく、学生への「就職」指導も重要な仕事の一つとして取り組むことが課題となっているとしている。しかし同様に、就職支援を通じてすべての学生を「正社員」にすることは不可能であるとも指摘し、作家と就職に加え、「フリーター」的な生き方を駆除されるべき対象として位置づけることにも無理があるとしている。

3. 方法

そこで、本研究では、芸術系学部において一般の民間企業の内定を獲得した学生の美術・工芸に対する意識が、就職活動を通じてどのように変化したのかを質的に検討することにより、芸術系学部の学生に対する有効な就職支援を提示することを目的としたい。以下、その方法について述べる。

3.1 メタ研究法としてのSCQRM（Structure Construction Qualitative Research Method）

本研究では、「美術・工芸に対する学生の意識の変化」という量的な測定が難しい事柄を掴むため、少数の事例を対象に深くその体験を聞き出すことで、学生の意識の変化を構造化することとした。そこで、少数事例の質的研究においても講義の科学性を担保し、対象とした事例の予測や制御につなげることが可能（西條・沖・金堂・上原・天江・佐野・大野・奥田・野田、2014）なSCQRM（Structure Construction Qualitative Research Method）（西條、2007、2008）をメタ研究法として採用することとした。

3.2 対象者

SCQRMでは自分の関心（リサーチクエスション）に照らして（相関的に）対象者をサンプリングする⁵（西條、2007）。本研究では、芸術系学部において一般の民間企業の内定を獲得した学生がその対象となるが、ひと言に芸術系学部の学生と言っても、分野によって

⁵ 関心相関的サンプリング（西條、2007）

その就職事情は異なる。就職という観点で分野を大きく2つに分けると、デザイン分野と美術・工芸分野に分けることができるだろう。デザイン分野の学生の多くは、学んできたデザインの知識や技術を活かし、デザイン会社や広告代理店、アニメ制作会社等を目指す。こういった業界は新卒採用においても比較的正社員の求人が多い。一方で、美術・工芸分野の学生は、西洋画や日本画、窯芸、染色、彫塑、木工などを学んできたが、これらの知識や技術を直接活かせる新卒正社員の求人は非常に少ない。そこで本研究では、デザイン以外の分野を専攻した学生で、かつ一般の民間企業の内定を獲得した学生（つまり、学んできたことから大きく進路転換したと思われる学生）を対象とすることとした。

また芸術系学部に対する有効な就職支援を探ることを目的としているため、キャリアセンターの就職支援を利用したことがあり、大学で実施されている就職支援について一定の知識を持った学生を対象とすることとした。

上記の観点から選出されたのが図表3にあげた3名である。

図表3 対象者一覧

対象者	専攻	利用したことがある就職支援	内定先
Aさん	西洋画	・個別相談 ・個別指導（エントリーシート、履歴書の添削）	アパレル （総合職）
Bさん	染色	・個別相談 ・個別指導（エントリーシート、履歴書の添削） ・集団面接対策講座	医療法人 （総合職）
Cさん	彫塑	・個別相談 ・集団面接対策講座	自動車販売 （総合職）

出所：著者にて作成

3.3 分析の枠組み

本研究は、芸術系学部の学生に対する就職支援に関する有効な視点を提示することを目的としているため、データの分析から独自の説明概念をつくって、それらによって統合的に構成された説明力に優れた理論（木下、2003）であるグラウンデッド・セオリーから分化した修正版グラウンデッド・セオリー（以下、M-GTA）を分析の枠組みとして採用した。木下（2003）によると、M-GTAはグラウンデッド・セオリーを継承しつつも、データの切片化をせずそれに代わるデータの分析法を、独自のコーディング方法と【研究する人間】の視点とを組み合わせることで手順として説明している。また面接型調査に有効に活用できることから、本研究の枠組みとして有効であると考え⁶。

⁶ 木下（2003）は目安となる面接データを「10例から20例くらい」とし、それほど多数のデータは必要とはならないとしながらも、飽和化のためには一定量のデータに対する検討が必要としている。しかし本研究では上述した通り、少数事例の質的研究においても講義の科学性を担保し、対象とした事例の予測や制御につなげることが可能なSCQM（Structure Construction Qualitative Research Method：西條、2007、2008）をメタ研究法として採用することでこの課題を解決する。

3.4 調査時期とインタビュー方法

インタビューは2015年11月に著者の研究室にて実施した。1人あたりのインタビュー平均時間は53分である。対象者には事前に研究倫理に配慮することを説明し、インタビューの内容を録音する旨の承諾を得た。インタビュー終了後に逐語録を作成した。

インタビューは、事前に作成した半構造化した質問項目に沿って実施したが、それぞれの対象者の話を深めていけるよう配慮した。半構造化した質問項目の内容としてははじめに、内定を得るまでに一番苦労した点、について質問した。その後、就職活動当初、美術・工芸を活かせる仕事に就きたいと考えていたか、またその思いは就職活動を通じてどのように変化していったか、美術・工芸専攻であることは就職活動にどのような影響があったと思うかについて確認した。またインタビュー後半には、正社員の内定を獲得する上で、大学の就職支援はどのように役立ったか、他にあればよかったと思う支援についても質問した。

3.5 分析方法

分析は、木下（2003）に従い、分析ワークシートを用いて行った。木下（2003）によると、ワークシートは、概念名、その定義、ヴァリエーション、理論的メモの4つの欄で構成され、データとは切り離して別に作成する。具体的には、まずデータの着目箇所をヴァリエーションに記入し、次に検討の結果、採用することにした解釈を定義欄に記入する。それ以外の解釈案で重要なものは理論的メモ欄に記入する。そして定義を凝縮表現したコトバを概念欄に記入する。図表4として、概念名「社会で働く上での自分の強みを再認識」の分析ワークシート例をあげる。

図表4 概念名「社会で働く上での自分の強みを再認識」の分析ワークシート

概念名	社会で働く上での自分の強みを再認識
定義	就職活動を通じて、社会で働く上での自分の強みを再認識すること
ヴァリエーション	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のキャラとかを押して、総合展とかは使えるから、そういう運営の話とかでこっちに引っ張れるようにしました。できるだけ偏見なほうにいかないように。（〇〇さん） ・有利な点について言えば、美術ってよくわからないと思うんですけど、個人で結果を残せる分野だと思うんですよ。面接行って思ったんですけど、結構個人で成績を残している人は少なく、なので、個人で何をやって、何々を受賞したというのは結構大きなアピールポイントになると思います。（××さん） ・一回ちょっとグループ展の代表をやって、その関係でちょっといろいろと連絡を小まめにとったりはできたので、そこはちょっとだけ自分ができるところじゃないかなと思ってます。あんまり反応はよくなかったというか、普通ぐらいだったんですけど、部活動で何をやりましたかということ聞かれたときに、とりあえずそれをやりましたというのが言えるので、そこはよかったところだと思います。有利になるかどうかはわからないんですけど、何よりも自分のメンタルに一番きくと思うので、やはり何か取り組んでもらえたら後輩にとってもいいことになるんじゃないかと思います。（××さん） ・自分の作品をつくるだけじゃなくて、人の作品も多く見るんですよ。それが、何かその人の感情とか、その人の思いを感じとりながら作品を見るということは、多分、人と話すとき、それが人間と、人とかわっても、その人の気持ちとか、その人の、今どういった心情で私と話しているんだろうとか、そういうことを察しながら話すというのが、自然と多分身についたんですよ。それで、そういうこともあって、人と話すときはやっぱりその人が何を求めているんだろうとか、そういうのが接客業に自然と、好きな美術を通して生かせるんじゃないかなというのが一つよかった点ですね。（▲▲さん）
理論的メモ	特になし

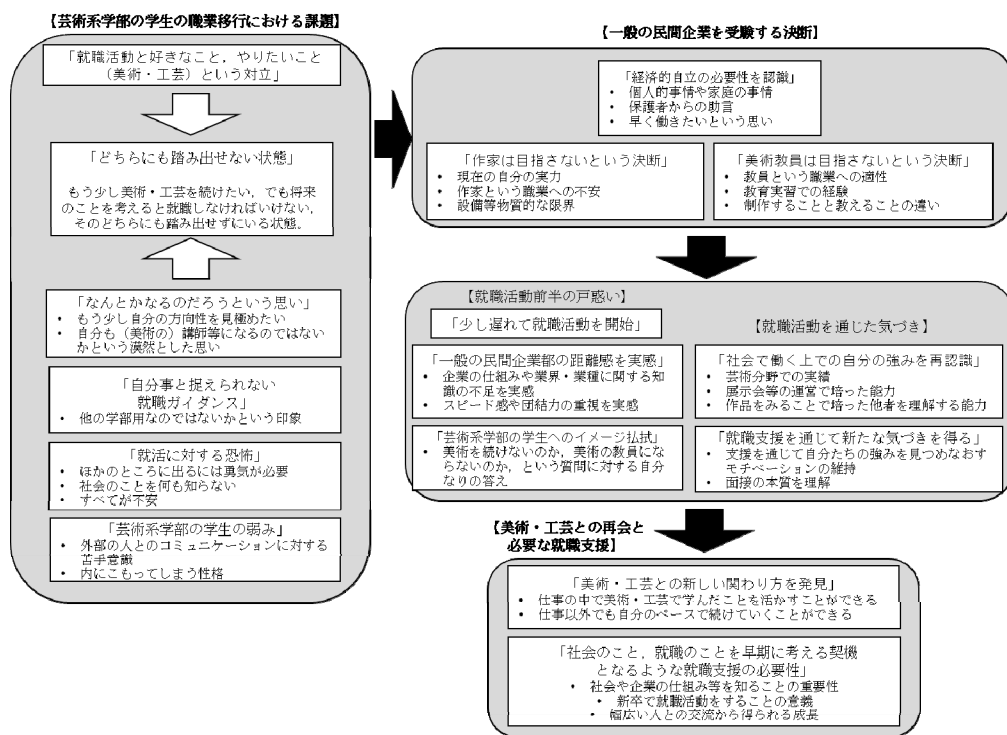
出所：著者にて作成

上記の手順で生成された概念は16となり、これらをその関連性からカテゴリーにまとめた。

4. 分析結果

生成された16の概念を、5つのカテゴリーに分けて整理し、芸術系学部学生の就職活動を通じた美術・工芸に対する意識の変化について、図表5の仮説モデルを作成した。以下に5つのカテゴリーとそのカテゴリーの属する概念の説明を行いながら、そのストーリーラインを述べる。以下、カテゴリーは【 】で、概念は「 」で表示することとする。

図表5 芸術系学部学生の就職活動を通じた美術・工芸に対する意識の変化に関する仮説モデル



出所：著者にて作成

まず【芸術系学部の学生の職業移行における課題】は「就職活動と好きなこと、やりたいこと（美術・工芸）という対立」、「どちらにも踏み出せない状況」、「なんとなくののだろうかという思い」、「自分事と捉えられない就職ガイダンス」、「就職活動に対する恐怖」、「芸術系学部の学生の弱み」、という6つの概念で構成された。芸術系学部の学生は当初、就職活動を“好きなこと、やりたいこと（美術・工芸）と対立するもの”として捉えており、

もう少し美術・工芸を続けたい、でも将来のことを考えると就職しなければいけない、その「どちらにも踏み出せない状態」にあると考えられる。この状態が長く続く学生は「芸術系学部の学生の弱み」でもある外部の人とのコミュニケーションに対する苦手意識や、内にこもってしまう性格が一部影響している。このような学生は「就職活動に対する恐怖」を感じ、学内の就職ガイダンス等も他の学部用なのではないかという理由で参加に消極的である。一方で、先輩の状況から考えると自分たちも最後には「なんとかなるのだろう」という思いを持ち、危機感のないまま就職活動時期を迎える。この点が、芸術系学部の学生の職業移行における課題であると考えられる。

【一般の民間企業を受験する決断】は「経済的自立の必要性」、「作家は目指さないという決断」、「美術教員は目指さないという決断」の3つの概念から構成された。「どちらにも踏み出せない状況」から一步踏み出せた要因として3名とも「経済的自立の必要性を認識」したことだと答えた。学生は「経済的自立の必要性を認識」し、その後、作家及び美術教員という選択肢の消滅を経て、一般の民間企業の就職活動を開始する。

【就職活動前半の戸惑い】は、「少し遅れて就職活動を開始」、「一般の民間企業との距離感を実感」、「芸術系学部の学生へのイメージ払拭」の3つの概念から構成された。就職活動を開始したものの、活動開始が遅かったため希望企業の説明会に参加できない、企業の仕組みや業界・業種に関する知識不足の実感、スピード感や団結力といった企業が重視していることの実感、そして面接で感じた芸術系学部の学生へのイメージなど、これまで知らなかった事柄・経験したことのない事柄に遭遇し、戸惑いが多い時期である。

【就職活動を通じた気づき】は、「社会で働く上での自分の強みを再認識」、「就職支援を通じて新たな気づきを得る」の2つの概念から構成された。戸惑いながら始めた就職活動であるが、その活動のプロセスや就職支援を通じて、学生時代に取り組んできた美術・工芸をどのように社会で活かすことができるのかを見つめなおす経験をしている。

【美術・工芸との再会と必要な就職支援】は、「美術・工芸との新しいかかわり方を発見」、「社会のこと、就職のことを早期に考える契機となるような就職支援の必要性」の2つのカテゴリから構成された。就職活動の中盤以降、学生は、一見美術・工芸とつながりがないように見える業界の仕事においても美術・工芸で学んだことを活かすことができることを発見し、また仕事以外でも自分のペースで続けていくことができることを感じる等、美術・工芸との新しい関わり方を発見し、納得して就職活動を終えている。そして就職活動全般を振り返り、社会のこと、就職のことを早期に考える契機となるような就職支援が必要であるという考えに至る。

5. 考察

本研究で明らかになった芸術系学部の学生に対する有効な就職支援は以下の3点にまとめることができる。

① 低学年から美術・工芸以外の世界と関わるができる機会の提供

芸術系学部 of 学生の職業移行における課題として、本研究においても、“好きなことややりたいことが実際の職業選択に結び付きにくい（概念「就職活動と好きなこと、やりたいこと（美術・工芸）という対立」）”という点が明らかとなり、先行研究を支持する分析結果となった。この対立構造から抜け出せない状態が続く原因として、就職活動というこれまでとは全く違う分野、人々とのコミュニケーションに対する苦手意識や恐怖があることが明らかとなった。このことから、低学年の頃より、他学部・他大学の学生や、地域の人々などと交流できる展示イベントの実施や、インターンシップの必修化、アルバイトなどを通じて、美術・工芸以外の関わるができる機会を提供すること重要だと考えられる。

② 経済的自立の必要性認識を促す取り組み

「就職活動と好きなこと、やりたいこと（美術・工芸）という対立」、「どちらにも踏み出せない状態」から一歩踏み出すきっかけとなるのが「経済的自立の必要性を認識」であることが本研究より明らかとなった。中央教育審議会（2011）は高等教育とは、自らの視野を広げ、進路を具体化し、それまでに育成した社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を専門分野の学修を通じて伸長・深化させていく段階であると述べている。好きなこと、やりたいこと（美術・工芸）を続けていくにしても、他の分野に進むにしても、将来的な経済的自立が前提となる。一見当たり前のように思えるこの現実を、改めてキャリア教育を通じて実感できるような取り組みが必要だと考えられる。また本研究の対象者においては、この「経済的自立の必要性を認識」を家庭からの指導により認識しているケースもあったことから、保護者からの働きかけが有効なケースもあると考えられる。

③ 就職は美術・工芸との新しいかかわり方のスタートであることを伝える

一般の民間企業への就職を決めた学生は、就職活動開始当初は戸惑いを感じていたものの、就職活動や就職支援を通じて、美術・工芸における自身の実績、美術・工芸を通じて身につけた自らの強みを再認識し、戸惑いを乗り越えていく。そして就職活動の後半には、学生時代とは違った形で美術との新しいかかわり方を発見していくことが本研究で明らかとなった。先行研究では「特に選抜性の高い美術系学科では「就職」＝「制作の休止・趣味化」という独特な意味づけがある」とも指摘されていたが、「就職」＝「制作の休止・趣味化」ではなく、新しい形で美術・工芸と関わるができるチャンスだと捉えることで、「就職活動と好きなこと、やりたいこと（美術・工芸）という対立」という構造を覆すことができる可能性がある。森田（2015）は、2014

年に実施した企業へのニーズ調査⁷の分析結果から、製造業や情報通信業、サービス業等、一見芸術とは関連が無いと思えるような業種においても、芸術系学部 of 学生への採用意欲や活躍フィールドがあると指摘している。美術・工芸と社会や企業、そしてその中の個々の仕事との繋がりを学生に対して確実かつ具体的に提示することが、今後の就職支援において重要な取り組みとなってくるだろう。

6. まとめと今後の課題

本研究は、芸術系学部において一般の民間企業の内定を獲得した学生の美術・工芸に対する意識が、就職活動を通じてどのように変化したのかを質的に検討することにより、芸術系学部の学生に対する有効な就職支援を提示してきた。

本研究の対象は3件と少ない事例ではあるが、芸術系学部で一般の民間企業に就職することを決めた学生の就職活動の実態や、就職活動を通じた美術・工芸に対する意識の変化を捉えることができた。また先行研究で課題とされていた「就職活動と好きなこと、やりたいこと（美術・工芸）という対立」構造から抜け出すために有効な就職支援の視点として、①低学年から美術・工芸以外の世界と関わることができる機会の提供、②経済的自立の必要性認識を促す取り組み、③就職は美術・工芸との新しいかかわり方のスタートとなることを伝える、という新たな知見を得ることができた。これら3点は、芸術系学部の学生に対する就職支援の根幹をなすものであり、今後これらをキャリア教育・就職支援に組み込むことで、芸術系学部の学生の職業移行に関する課題解決の糸口としたい。

一方で、本研究で得られた知見について、経年的に調査するなど対象事例数の蓄積により信頼性を強化することも必要であろう。この点についても今後の課題としてさらなる検証を進めたい。

謝辞

本研究にあたり、インタビューを受けることを快諾してくださった3名の対象者の方に御礼申し上げます。また日頃、キャリア教育・就職支援に関してご指導くださる関係者の方々にもこの場を借りて御礼申し上げます。

⁷ 調査対象は、過去3年間に佐賀大学の学生を採用した実績のある企業995社および自治体39機関と芸術・美術・デザイン・広告関連等企業174社の計1,208社で、調査方法は、自記式質問紙調査によるアンケート調査（郵送）である。調査実施期間は2014年8月～9月で、回収率は27.7%（336社）。

引用・参考文献

- 荒川葉（2009）『「夢追い」型進路形成の功罪－高校改革の社会学－』東信堂.
- 生駒俊樹（2010）「キャリアデザイン形成過程の研究－芸術系大学生の進路選択」『キャリアデザイン研究』Vol6、pp. 103-112.
- 居郷至伸（2012）「芸術系大学の就職支援を読み解く－就労をめぐる語りに注目して－」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』（64）、pp. 322-323.
- 一般社団法人 日本経済団体連合会（2014）『新卒採用（2014年4月入社対象）に関するアンケート調査結果』.
- 榎本和生・安部千隆・佐原龍誌・清田義英・西谷成憲・松田直成・畔上洋一（2008）「キャリア発達に関する基礎研究－本学学生のキャリア発達支援プログラムの開発を目指して」『多摩美術大学研究紀要』第23号、pp. 211-217.
- 岡部悟志・樋口健（2009）「企業が採用時の要件として大卒者に求める能力とその評価方法」『大学教育学会 第31回大会 自由研究発表Ⅲ「学士課程教育」発表資料』.
- 学校法人帝塚山大学（2012）『帝塚山大学新設ニーズ調査結果報告書（抜粋）』.
- 川嶋太津夫（2010a）「アウトカム重視の高等教育改革－高等教育の質保証とアカウンタビリティ－」『学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究』pp. 73-83.
- 川嶋太津夫（2010b）「ジェネリック・スキルとアセスメントに関する国際動向」『学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究』pp. 155-160.
- 喜始照宣（2014）「芸術系大学出身者と労働」『日本労働研究雑誌』No.645/April、pp. 50-53.
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い』、弘文堂.
- 西條剛央・沖尚彦・金堂聖子・上原美穂・天江健史・佐野和弘・大野慎悟・奥田祐介・野田麻衣子（2014）「MBAでステップアップに成功したMBAホルダーは、MBA課程でどのような経験をし、それをどのように役立てているか－SCQRMによる視点提示型研究－」『早稲田国際経営研究』No. 45、149-167.
- 西條剛央（2007）『ライブ講義・質的研究とは何か：SCQRMベーシック編』、新曜社.
- 西條剛央（2008）『ライブ講義・質的研究とは何か：SCQRMアドバンス編』、新曜社.
- 中央教育審議会（2011）『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』、文部科学省.
- 森田佐知子（2015）「産業界ニーズから見た芸術系学部におけるキャリア教育の在り方」『佐賀大学全学教育機構紀要』第3号、125-136.
- 真鍋倫子（2013）「大学教育とキャリアをつなげること－芸術系の大学へのヒアリングから－」『教育学論集』第55集、pp. 153-170.